

## 今週の為替相場見通し(2021年4月12日)

| 総括表              |             | 先週の値動き |                                    |                  | 今週の予想レンジ                           |  |
|------------------|-------------|--------|------------------------------------|------------------|------------------------------------|--|
|                  |             | 注      | レンジ                                | 終値               |                                    |  |
| 米ドル              | (円)         |        | 109.00 ~ 110.75                    | 109.65           | 108.00 ~ 110.50                    |  |
| ユーロ<br>(1ユーロ=)   | (ドル)<br>(円) |        | 1.1738 ~ 1.1928<br>129.59 ~ 130.67 | 1.1901<br>130.51 | 1.1800 ~ 1.1950<br>129.00 ~ 131.50 |  |
| 英ポンド<br>(1英ポンド=) | (ドル)<br>(円) | *      | 1.3670 ~ 1.3919<br>149.60 ~ 153.41 | 1.3706<br>150.32 | 1.3560 ~ 1.3780<br>148.50 ~ 151.50 |  |
| 豪ドル<br>(1豪ドル=)   | (ドル)<br>(円) | *      | 0.7588 ~ 0.7676<br>83.04 ~ 84.46   | 0.7618<br>83.56  | 0.7575 ~ 0.7700<br>83.00 ~ 84.50   |  |

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

### 1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 大谷 未央

(1)今週の予想レンジ: 108.00 ~ 110.50 円

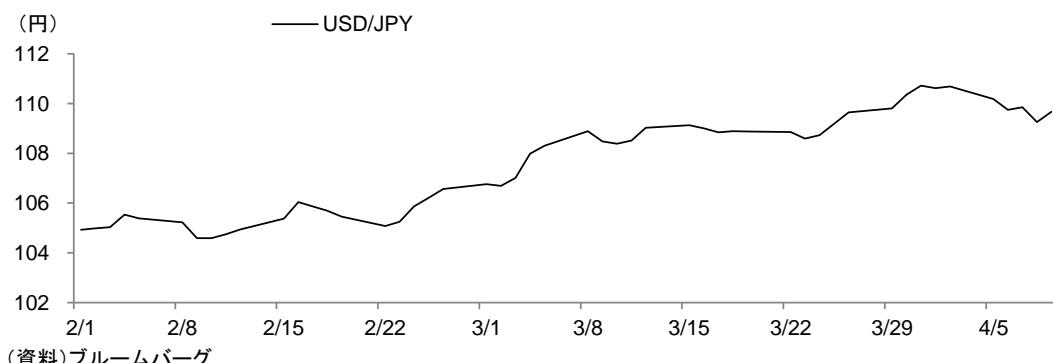
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は下落する展開。週初5日110.69円でオープンしたドル/円は、前週末の米3月雇用統計が良好な結果を好感した流れを受けて、一時年初来高値となる110.75円まで上昇したが、主要な海外市場が休場となる中、上値は限定的。その後は米金利が低下するとドル/円は109円台後半まで下落した。翌6日は株式市場が堅調推移する動きにドル/円は110円台半ばまで上昇。その後米金利が低下する中、断続的にドル売りが持ち込まれ109.60円台まで下落。売り一巡後はユーロ円の上昇にサポートされ、109.90円台まで値を戻した。7日は本邦勢の実需のドル買いと米金利の軟調推移を背景としたドル売りが交錯する中、109円台後半で上値の重い展開となった。8日は米失業保険申請件数が市場予想より下振れる結果となり、米金利も低下する展開にドル/円は一時週安値となる109円ちょうどをつけた。9日は米3月PPIが市場予想を上回る結果に、インフレ加速への警戒感から米金利が上昇する流れにドル/円は109円台後半まで上昇。しかし節目の110円手前では戻り売りが出たことで、109円台半ば付近まで下落し、その後109円台後半で越週した。

今週のドル/円相場は上値重い推移を予想する。先週は米金利上昇・ドル高が一服しており、ドル/円は足元調整色が強まっているが、今週についても引き続きドル/円は米金利を睨みながらの展開になると考える。先週発表されたFOMC議事要旨では、テーパリング開始まで時間を要するという見方が改めて確認されており、またパウエルFRB議長含めFRB高官からは、緩和解除に慎重な発言が相次いでいる。そのような環境下、米金利が現状の水準を超えて大幅に上昇するにはもう一段の材料が必要になると想定されるため、ドル/円は引き続き上値重い展開となろう。また、今週は経済指標の発表が相次ぐが、良好な米3月雇用統計の結果を受けてもドル/円は111円を突破できなかつたことに鑑みると、発表となる経済指標の結果が堅調となってもドル/円の上値は限定的であると考える。重要な経済指標としては、13日(火)に米3月CPI、14日(水)に米3月輸出/輸入物価指数、15日(木)に米3月小売売上高、米4月NY連銀製造業景況指数、米3月鉱工業生産、16日(金)に米4月ミシガン大学消費者マインドの発表を予定している。

(3)先週までの相場の推移

先週(4/5~4/9)の値動き: 安値 109.00 円 高値 110.75 円 終値 109.65 円



## 2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 玉井 美季子

(1)今週の予想レンジ: 1.1800 ~ 1.1950 129.00 ~ 131.50 円

### (2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は堅調推移。週初5日、1.17台後半でオープンしたユーロ/ドルは、域内の主要国でロックダウンやワクチン接種が遅れていることが嫌気されて、一時週安値となる1.1738まで下落した。しかしその後は、ドル売り優勢地合いとなる中、ユーロ/ドルは1.18台前半まで上昇し、徐々に値を戻した。6日にかけても前日後半のドル売り優勢の展開が継続した。ユーロ/ポンドの上昇にサポートされたほか、米金利の低下もあいまって、ユーロ/ドルは1.18台後半まで続伸した。7日も、ユーロ/ドルは堅調で一時1.19台前半まで上昇。しかしクノット・オランダ中銀総裁の域内の物価動向に関して慎重な見方を示したことや、下落が続いている米金利の持ち直しを受けてドルが買い戻されると、1.18台後半まで弱含んだ。8日には、ユーロ/円が下げ渋ったことやユーロ/ポンドの上昇の流れを受けてユーロ/ドルは一時週高値となる1.1928まで連れ高となった。9日は米金利上昇を受けて1.19を割れる場面もあったものの、その後米金利が上げ幅を縮小し結局1.19台前半で越週した。ユーロ/円はドル/円とユーロ/ドルの動きに挟まれもみ合いの展開。週初130円台前半でスタートしたユーロ/円は、欧州が休場の中、動意に乏しい展開。6日には欧州株が堅調に推移したことでも130円半ばまで上昇したものの、米金利低下を背景にドル/円が110円を割れる動きにユーロ/円も129円台後半まで反落。しかし7日にはユーロ圏の指標が強かったことや米金利の低下を受けユーロ/ドルが上昇し、ユーロ/円も週高値となる130.67円まで上昇した。その後上値の重い動きが続いたが8日米国時間に米指標悪化を受けドル/円が下落する動きにユーロ/円も週安値となる129.59円まで下落した。しかしユーロ/ドルが堅調に推移する中、ユーロ円は再び130円台に戻し130円台半ばで越週した。

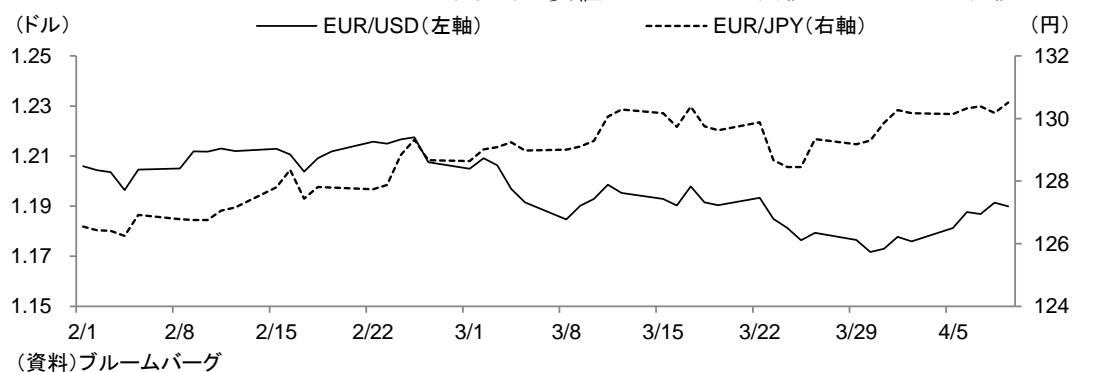
今週のユーロは上値の重い動きを予想する。米国は新型コロナウイルスのワクチン普及に加え大規模経済対策への期待もあり経済回復への期待が高まっている。一方ユーロ圏は新型コロナウイルスの感染拡大が止まっておらず、またワクチンに関しても英国製ワクチンに対する安全性の懸念もあり米国対比普及が遅れている。先週は強い米経済指標にもかかわらず、米金利低下を受けたドル売り優勢の流れとなつたが、上述の通りユーロが積極的に買われる材料は見当たらず、あくまで調整の動きであったと考えており今週のユーロは軟調推移を予想する。ただ、強い米指標への市場の反応が弱くなっている中、今週は米国で3月CPIや小売売上高、鉱工業生産等の発表が予定されており、市場予想より低調な結果が出る場面ではドル売りが強まる可能性に注意したい。

### (3)先週までの相場の推移

先週(4/5~4/9)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1738 高値 1.1928 終値 1.1901

(対円) 安値 129.59 高値 130.67 終値 130.51



### 3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1)今週の予想レンジ: 1.3560 ~ 1.3780 148.50 ~ 151.50 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、全面安。対ドルでこそ上振れが先行したものの、週の大半は一方的な下押しを続けた。対円、対ユーロでは、滑り出しの横這いから(上振れなし)、一方的な下落を支配的とした。ジョンソン英首相は、5日、行動制限措置の一段の緩和を発表。12日からの、生活必需品以外の店舗販売や、屋外における飲食店などの営業再開を正式に発表した。新型コロナウイルスに対するワクチン接種の進捗も引き続き堅調で、英における経済活動の復活には死角がないように見えた。敢えてポンド悪材料を探すなら、英のEU離脱により、英本土より「切り離された(見捨てられた)」などと感じた北アイルランド住民による暴動が連日報じられたことや、副反応(血栓)が懸念された新型コロナウイルスの英製ワクチンの接種に関し、7日、英政府自身が限定すると発表した(血栓が生じるリスクよりも、新型コロナが重症化するリスクの方が低くなると推計される30歳以下の若者には、他社製ワクチンを接種する選択権を与えた)ことなどを挙げることはできただろう。それでも、ここまで的一方的なポンド安進行を説明する要因としては、上述悪材料を両方併せても弱く、何か他のポンド売り材料を想定するのが妥当と思われた。こうした文脈で有力視されたのは、英ファンドによる本邦大手電機会社買収提案だったであろう。「7日にも、2兆円規模の、正式な買収提案を行う見込み」と報じられたのは、6日の欧州時間夕方のことであったが、その前後から週引けに掛けてのポンド全面安は、同買収に絡む円買い/ポンド売り手当てや、それに便乗したポンド売りの可能性を明確に示唆した。

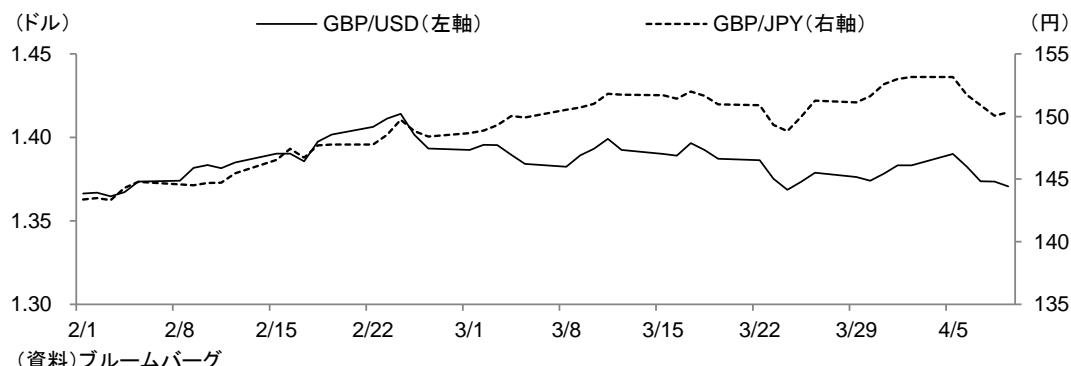
今週の英ポンド相場は、続落を予想。ポンド相場の中長期的な方向感が、年初来3か月超に及んだ堅調地合い(2月央からのドル全面高は別物として)から、ポンド安方向に転じたか否かの見極めには、もう数週間を要するものと思われるが、少なくとも、目先は、ポンドの戻り安値を探る展開が続くのではなかろうか。特に、対ユーロでの急反落ぶりに、今しばらく、ポンド調整安の余地を見極める必要があるようを感じられる。ワクチン接種進捗の優位が通貨高を支えるとの見方は、確かに一理あるとは思うものの、正直、あくまでも短期的なセンチメントの問題に過ぎないと考えていた。ワクチン接種の優劣と言っても、主要国間にあって、所詮は、数か月~半年程度の時差の問題と思われたし、そもそも、これだけ国境を越えた通商関係が緊密化した現代において、英國一国の消費活動再開が生み出す需要効果などたかが知れているはず。その点、中国や米国と英国とを同列に扱うのは不自然と位置づけていたものの、実際に、ポンド堅調が続くと、「そういうものかな?」と認めざるを得ない心境でいた。今にして思えば、そのこと自体が、市場のポンド買いが飽和状態に近づいていた可能性を示唆していたのではないか。そうやって自分を納得させようと思った矢先に、このポンド急落である。その原動力が、企業買収に絡む実弾(円買い/ポンド売り)であった可能性は高いと考えるが、きっかけは何であれ、3か月以上続いたポンド堅調から、一気にポンド全面安に転じた地合が、僅か1週間足らずで収束する可能性は低いように思われる。また、上述した北アイルランド暴動や、英製ワクチンの問題(ワクチンナショナリズム)は、いずれも英のEU離脱とは切り離せない負の側面を持つ。この間、金融市場の注目度は決して高くはなかったものの、仮に近い将来、新型コロナ騒動が落ち着いた英國で何が市井の注目を集めのか、次の注目要因を示唆しているようにも思われる。

(3)先週までの相場の推移

先週(4/5~4/9)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3670 高値 1.3919 終値 1.3706

(対円) 安値 149.60 高値 153.41 終値 150.32



## 4. 豪ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 大庭 泰典

(1)今週の予想レンジ: 0.7575 ~ 0.7700 83.00 ~ 84.50 円

### (2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.7630付近を挟んだレンジ推移。週初は0.76近辺で取引開始後、オセアニア市場が休場な中、0.76台前半で小幅な値動きに終始。NY時間に発表された米3月ISM非製造業景況感指数が統計史上最高を記録すると、米株は全般的に上昇し豪ドルも0.7660近辺まで上昇。6日は0.7650近辺で取引開始後、RBAを控えて様子見。RBAでは市場予想通り、政策金利を据え置くとともに、2024年まで現在の低金利を維持する方針を改めて示した。また、豪経済は想定より速いペースで回復していると楽観的な見通しを示すも、足元の住宅価格上昇に関しては注意深く監視する所とし、イールドカーブ・コントロールの対象となる国債銘柄の変更を年内に検討するとの説明も加わった。サプライズとなる内容は含まれておらず、声明文発表後、豪ドルはRBA前の下げを全戻し。欧州時間に入り、利益確定の売りの動きから一時0.7606近辺まで下落したが、米金利の低下につられて米ドル売りが持ち込まれると、豪ドルは買い戻されて0.7660辺りまで上昇して引けた。7日は0.7680近辺まで上昇するも、その後は上値が重くNY時間にかけて0.7600近辺まで、豪ドル円は83.50円近辺まで下落。NY時間に3月分のFOMC議事要旨が公表されたが想定の範囲内の文言で、テーパリングに関する協議等新たな手掛かり材料もなく反応は限定的となった。8日は特段主要指標等がなかったものの米金利低下からのドル売り等を背景に一日を通して0.76前半から半ばまで戻す形となった。NY時間にパウエルFRB議長が「インフレは一時的なものになる」との見通しを改めて示し、これを受けて米株は上昇。リスクセンチメントがやや安定した事も豪ドルを支えた。9日は米クラリダFRB副議長のインタビューや良好な米経済指標を背景に米金利が上昇すると、豪ドルは売られ、0.7618で越週した。

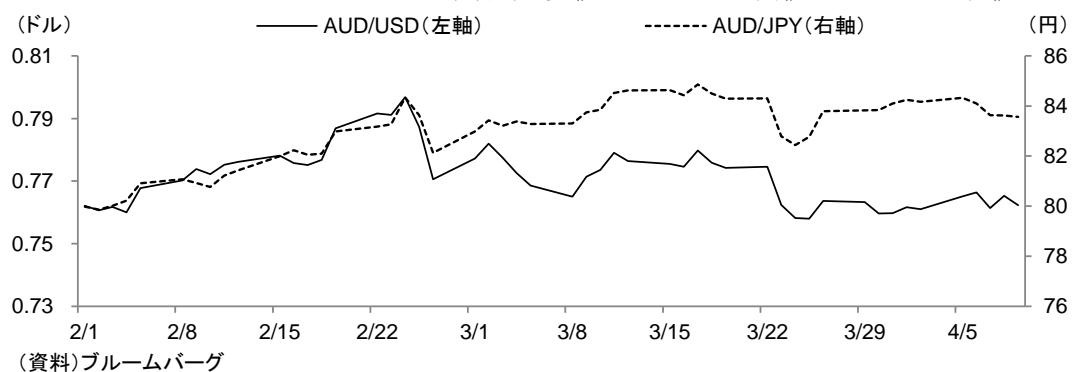
豪ドルは長期的には上昇余地はあるものの、足許調整局面を迎えていると考える。ドル/円の昨年度末の上昇スピードと同じく、豪ドルも2月までの原油相場の上昇スピードに対し3月、4月と調整していくように見える。新型コロナの変異株等による世界的な感染拡大に歯止めがきかない状況に、経済回復の見通しが不透明となっているからであろう。また、資源国通貨の動向を左右する原油市場も当面は方向感の見出し難い。OPECと非OPEC主要産油国で構成されるOPECプラスの協調減産の行方が注目される一方で、世界の原油需要動向も注視されおり、世界景気に対する市場の回復期待が原油相場を下支えしているが、景気回復には依然懐疑的な見方が残っている。OPECプラスの動向次第で原油価格が動く可能性はあるが、今の水準から大きく上昇トレンドに変えるには至らないであろう。今週の経済指標は13日(火)豪3月NAB企業景況感、15日(木)豪3月雇用統計、16日(金)中3月新築住宅価格、中1~3月期GDP、中3月鉱工業生産、中3月小売売上高、中3月固定資産投資、中3月不動産投資が予定されている。

### (3)先週までの相場の推移

先週(4/5~4/9)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7588 高値 0.7676 終値 0.7618

(対円) 安値 83.04 高値 84.46 終値 83.56



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。